

コミュニティに根ざした社会的企業の可能性

—授乳服開発の事例から—

遠藤雅子

東海学院大学健康福祉学部総合福祉学科

要 約

わが国の女性のライフコースの特徴は、いわゆるM字型労働力率曲線にあらわれているとおり、就労中断・再就職型である。女性の活用促進を現実のものにしていくためには、ライフコースを踏まえて検討していく必要があり、就労中断・再就職を希望する女性たちや、緩やかに就業継続を希望する女性たちの“生き方・働き方”のありようは、女性の生活の、家庭や社会における位置づけに関する視点と無縁では語れない。そこで、これまであまり研究対象とならなかった授乳中の女性たちに着目し、ソーシャルデザインの視点から「授乳服」のデザインを取り上げることは意義深いと考えた。調査は2年にわたりインタビューおよび質問紙等により複合的にを行った。

本稿では、授乳中の女性の行動範囲を広げ、ライフスタイルに変容をもたらした「授乳服」の開発経緯と、生活様式の変化、新しい働き方を選択した女性たちの意識の変容を明らかにした。

キーワード：授乳服、ライフスタイル、ソーシャルデザイン、社会的企業

1. はじめに

本稿は授乳服の開発が女性の生活に広がりをもたらした事例を通して、コミュニティに根ざした社会的企業の可能性に関して考察することを研究の目的とした。

わが国の女性生活史¹を概観してみると、近代における住まいの変遷が現代の「家庭」の成立につながる道筋がみえてくる。都市流民の住まいや暮らし方が、農村生活に変容をもたらし、家族の小規模化、核家族化に拍車をかけた。当時は授乳が、「神聖なる婦人の天職」²であり、衛生環境の変化、衛生知識の普及・衛生観念の浸透は、女性の意識や女性観を変えた。1900年前後の時期は、①女性に身体への自覚と配慮を促し、②身体の標準を生み出し、③それが差別と排除を引き起こし、④女性に役割分担を強要し、固定化した時代であった。

本来多様な出産のありようが、「標準」の名の元に「正常」分娩が目標とされるようになると、子どもの体格を比較し、標準を序列化、病弱な子どもへの差別と排除に至った。衛生観念の普及は、その担い手としての女性の存在を浮上させ、「主婦」「母親」として家庭の衛生管理、子どもの健康管理という役割を強要、固定化することになったといわれる。³その後、母性保護に関する論争⁴が

行われ、男性中心の女性観や家庭観とそのありようを相対化する主張が見られるようになったものの、性別役割分業に関する研究は今も数多くみられ、女性活用の施策を考えるうえでも大きなポイントとなっている。

自然の営みである授乳が、近代以降、女性の生活を制約してきた可能性は否めない。授乳という私的行為が社会のなかで認められることにより、産業社会のなかで矛盾なく女性の能力が生かされる可能性がみえてくるのではなかろうか。個人が生き生きと働き、地域と関わる可能性を研究するためには、個人の生活が社会全体のなかでどのように位置づけられているかという視点が欠かせない。⁵地域の課題を解決し、社会をよりよくするためのしくみをソーシャルデザインというならば、解決プロセスが“見える化”され、共感から活動を喚起し、人々がよりよく在るためのムーブメントを起こす行為⁶として、授乳服のもたらす可能性について検討することは意義深いと考える。デザインとは人間生活のあるべき姿の創出に向け、日常生活や非日常生活のなかで使用されるもの、さらには、日々の生活のために私たちが行うさまざまなことを計画・設計するための技術と実践である。⁷そこで今回は「授乳服」という新しい商品を世に輩出

したM社の創業者および社員を対象に調査を行い、「授乳服」の開発経緯と、生活様式の変化、新しい働き方を選択した女性たちの意識の変容を明らかにした。

2. 調査の目的と方法

2-1. 開発経緯について

これまで授乳服というカテゴリーは無かった。そこで、M社の創業者A氏に開発のきっかけ、デザインの工夫、販売に至る経緯と今後の展望について、半構造化インタビューを行った。2014年7月14日に実施した。

2-2. 使用感と生活様式の変化について

顧客からの意見・感想はHP上で公開されていたため、一部を抜粋・要約して記載した。また、授乳服を着用し、業務に従事している社員に対して、仕事の仕方、生活上の変化について半構造化インタビューを行った。2014年8月13日に実施した。

2-3. 新しい働き方の提案について

初回のインタビューから約1年半が経過したところで、正社員の短時間勤務を制度化したので、創業者A氏に電話にて半構造化インタビューを行った。2016年3月30日に実施した。

2-4. 正社員を選択した後の変化について

同社が提案した「短時間勤務正社員」の制度を利用開始した社員6名に対して、現状と今後の展望に関して質問紙をE-mailにて送り、回答を回収した。2016年4月19日から29日の間に実施した。

3. 授乳服開発の経緯

3-1. 開発から都内出店まで

1977年の夏、A氏は3歳の長女と生後1ヶ月の次女とともに茨城県内の自宅から東京の立川まで外出した。高速バスとJR中央線に乗継ぎ、ようやく電車が空いてきた頃に次女が泣き出した。当時はまだ電車の中に赤ん坊を見かけることがほとんどない時代である。A氏は母乳で苦労した体験があったため、授乳を我慢すると母乳が止まってしまうと思い、途中下車して授乳することも思いつけなかったという。しんとした男性ばかりの車内で次女は泣き止まず、A氏は車中で授乳を決行した。

そこで浴びた視線に対して思ったことは、「恥ずかしいというよりも、これでは産後のお母さんは外に出られないじゃないか。」だった。それが授乳服の開発・販売へとつながった。しかし開業時はほとんど売れなかった。理由を探ると「子育てにお金がかかるので、自分のものを

買うのは我慢する。子どもが成長するまで外に出なければよいのだから。」という声が聞こえてきた。そこで、ステージ上で授乳するファッションショー（図1）を開催することにした。



図1 授乳しながらのファッションショー

金銭的余裕はなく、縫製の外注スタッフ、ボランティア達と顧客にも「赤ちゃんと一緒にこの服を着てステージに立ってください」と出演を依頼した。授乳する姿を家族や一般の人たちに見てもらおうことを繰り返すなかで、「授乳中は家庭で育児に専念するものだ」という常識に違和感を覚える人たちが少しずつ現れ、授乳服が浸透していった。

2002年の法人化に際してA氏は事業を営利組織にするか非営利組織にするか迷ったという。活動の実態はNPO法人に限りなく近かったが、将来スタッフに賃金をしっかり支払える仕組みづくりを目指し、有限会社M社を立ち上げた。創業時から支えてくれたボランティアスタッフの多くが授乳中であつたことから、子連れ出勤が始まった。図2・3・4・5のように、会社の中に家庭と同じ状態を作ってみたら、子どもを隔離する必要がないので、コストはかからない。子どもと同じ空間で仕事をするという形は、伝統社会の中にあつたものである。

同社は2004年に特許を申請し、取得できた。さらに2010年にはグッドデザイン賞を受賞⁸し、授乳服ブランドを社会に位置づけた。現在M社は本社と2店舗（茨城県内、都内）の3ヶ所で子連れ出勤を許可している。それぞれ勤務形態が異なるため、最初は家庭に近い環境の本社勤務から始めていく。都内のショップでは販売アドバイザーの仕事が中心で、電車通勤や立ち仕事という負荷があるものの、店内にはお客様と兼用のベビーベッドもあり、独立した店舗であることから、本社と同じルールで働くことができる。茨城県内の店舗は、百貨店の売

り場なのでそのルールに準じて働く必要があり、子連れで就業できる時期やスタッフ数は限られ、ハードルはかなり高い。夫の転勤で地方に転居したスタッフや、集中力を要するデザインを担当するスタッフの中には、在宅勤務のケースもある。これらは予定していたわけではなく、ハプニング的に生じた事例に対応する形でつくってきた働き方である。余裕が出てくると、別の仕事を任されることもある。柔軟さがワークシェアリングの可能性を広げている。



図2 本社でのデスクワーク



図3 本社企画会議



図4 店舗での勤務

2011年の東日本大震災の後には、被災地応援基金を設けて支援を募った。図6のポスターはユニバーサルデザ

インを意識したものである。支援金を元に、被災地で授乳中の母親へ授乳服を直接送る活動も行った。2012年には銀座で授乳パレードを行った。約30名が授乳服を着て赤ん坊をだっこし、授乳しながら歩行者天国の5丁目から8丁目を歩ききった。しかしA氏は開始してすぐに失敗に気づいた。授乳中であることが誰にもわからないのだ。そこで慌ててその場で「授乳中です」という紙を用意し、持ちながらパレードした。すると高齢者からは、「こんな過ごし方があるのね」などと声をかけてもらうことができた。多様なライフスタイルを“見える化”することで、多様な世代に広げていく試みであった。かつて畑や商店などでは子育てと仕事は共存していたが、現代社会でも発想を変えれば社会のいたるところで「子連れスタイル」が可能になることを、イベントを通じて多くの人に知ってもらう試みであった。出産後の女性の力を社会に生かすサポート活動は、2013年1月に「NPO 法人子連れスタイル推進協会」を立ち上げた。

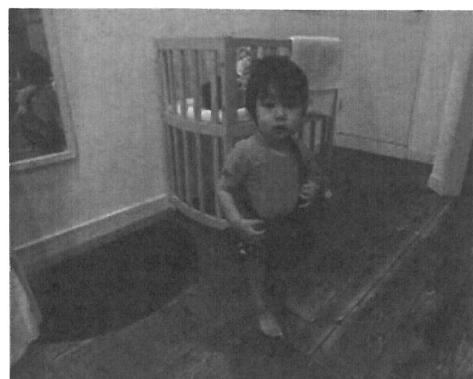


図5 店舗で過ごす子どもたち



図6 ユニバーサルデザインのブラを被災地に送るキャンペーンポスター

3-2. 授乳服の市場化

店舗では、商品だけではなく同じ母親同士、育児や出産の話に及ぶこともあるという。特に都内の店舗では、

都心にありながら等身大の親しいつながりが生まれている。授乳服をプレゼントに送ろうという男性や年配女性も少なくない。スタッフは授乳服にスリング（図7）という抱っこひもを身につけて仕事をする。ハンモックのように布に沿って抱っこするので、母親の肩や腰への負担が少ない構造になっており、新生児から使用できる。乳児の体に直接触れること（アタッチメント）で、安心感を与えられそうだ。

百貨店での子連れ出勤は、実は百貨店側からの提案だった。テナント契約に携わる百貨店の社員からは、「やはり初めは不安や戸惑いがありました。でも、問題が生じる度に話し合っ解決してきたので、今では赤ちゃんがいるのは当たり前になりましたね。百貨店をただ商品を購入するところとしてではなく、子育てしていくなかでほっと息がつける楽しい売り場ととらえていただけることが理想です。そして赤ちゃんと共に成長していきたいですね。」⁹子連れ出勤は、出産や育児を経験しながら社会のなかで自立できる仕組みとして期待できる。



図7 スリング

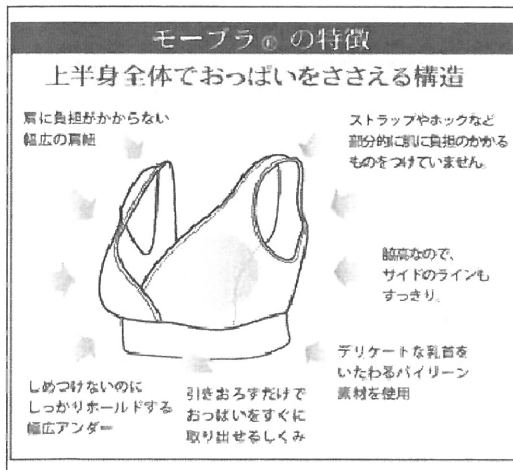


図8 モーブブラ

3-3. 授乳期における補整下着の利用実態と評価

授乳服のデザインは、A氏と専門のデザイナーが担当している。2011年には「モーブラ」（図8）がグッドデザイン賞を受賞した。

表1は利用者の声を一部抜粋し、まとめたものである。妊娠期・授乳期の女性のバストは、単にサイズアップするだけではなく、授乳行動の前後によっても変化するため、その変化に対応できるブラジャーが必要である。一般のブラジャーはバストを美しく補正し、活動に対する振動から乳房を支えるためのもので、装飾性があり、ワイヤー入りのものが多い。バストの形の形状が変化しないことが前提で作られているため、妊娠期に着用すると乳房の生理的変化を妨げる恐れがある。さらに、妊娠期や授乳期のバストは乳腺が活発に活動しているため、ブラジャーは敏感な状態に対応するように、しめつけず、優しく支える構造であることが大切だ。¹⁰

表2は、鳴海多恵子らが行った授乳ブラジャーの利用実態と意識調査¹¹の結果をまとめたものである。

表1 利用者の声

(http://www.mo-house.net/story_2010/9_29/より)

| |
|---|
| <p>まーママ 1人目妊娠中、つわり期からモーブラを使い始め、授乳が終わってからも、毎日使っています。モーブラちゃんとの出会ってからは、そのフィット感から、ちゃんとうーザーに移行しました。(略)ますます離れられなくなりそうです。(8/27 9:13)</p> |
| <p>panji 私自身授乳中でいつも愛用していますが、70歳になる母にプレゼントしたところなかなか自分が好むブラがないといていた母が、すごくいい！お友達にもすすめるわ！と大絶賛しました。(8/27 3:04)</p> |

表2 利用実態と意識調査結果

| |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 授乳ブラジャーは90%以上の育児経験のある女性に利用されていた。 |
| <ul style="list-style-type: none"> 利用開始時期は「妊娠中から」が57%、「出産直後から」が37%であった。 |
| <ul style="list-style-type: none"> 形状はハーフトップ型のブラジャーの利用が多かった。 |
| <ul style="list-style-type: none"> 授乳ブラジャーの購入価格は、1,000円台から2,000円台が多いが、育児経験が多くなるにつれて、1,000円未満が増加する傾向がみられた。 |
| <ul style="list-style-type: none"> 授乳ブラジャーに関する情報は、「マタニティ雑誌」から得ている人が多かった。 |
| <ul style="list-style-type: none"> 「店頭」で購入することが多いが、試着をする人は20%程度であった。 |
| <ul style="list-style-type: none"> 授乳ブラジャー選択において重要視する点は「授乳機能」であり、次いで「素材」「価格」であった。低価格でありながら授乳しやすく、付け心地のよい素材であること |

が求められていることがわかった。

・授乳ブラジャーの色やデザイン、バストアップなどの携帯適合性に関する評価は低かったが、授乳のしやすさや、肌触りは評価が高かった。耐久性については、型崩れがしやすいことが指摘された。

3-4. 授乳服としての工夫

授乳服のアイデアの元は和服である。背の高さや体の厚みにかかわらず、ある程度調節のきく和服は、洋装のように肌をはだけることなく授乳することが可能である。「身八つ口」という脇の切れ目は、多湿な気候の日本では、着物にこもる熱や湿気を逃がして体温を調節するためのスリットである。この切れ目は14, 15センチあり、着崩れを直す際にも便利である。ゆるめに着付けておけば、このスリットから授乳はできる。

最初に試作したレイヤー対応（前身ごろを2枚重ね合わせたゆったりデザインで、2枚の重なりを少し開けて前布が授乳部分を隠す）は、和服からデザインを得たという。開け閉めが楽な授乳服は、授乳回数の多い、新生児の母親に適している。ウエストを締めつけないデザインなので、マタニティウェアにもなる。特許も取得済みである。サイドスリップタイプは両脇のスリットから授乳ができる。上下の布が胸元を上手に隠し、左右の襟を着物のように合わせたカジュアルデザイン、下の身ごろの脇が開口部になったデザインのアンサンブルタイプは、授乳が終わった後もおしゃれ着として長く着ることができる。

3-5 新たな課題

新しいアイデアが定着することで、新たな課題も生まれる。商品の模倣がデザインの細部には至らず、結果として安価な粗悪品が流通することで、「授乳服は使い心地が悪い」となってしまうかねない。本来の目的である“授乳していることがわからない”点が達成されず、さらにケープをかけなければならない状況も生じている。不快な経験をした女性たちから授乳服への不信感を払しょくするには正しい情報発信をするのみという。しかし、いちごっこになりかねず、限界もある。

4. 授乳服がもたらした生活様式の変化

授乳服を使用した社員は、スタッフであると同時に顧客でもある。生活様式の変化について消費者の立場になって回答してもらったところ、肯定的な意見がみられた。物理的、精神的に自由になったことで、子どもとの向き合い方や仕事への集中の仕方が変化している。行動範囲

の広がりには社会における役割の幅も広げ、多様な社会参画の機会をもたらすものと期待できる。

【物理的な側面】

- ・電車通勤が可能になった。
- ・人工哺育では外出時の荷物が多く大変だったが、荷物から解放され、子連れの移動が安全になった。
- ・仕事と生活を分けて考えず、育児をしながら仕事ができる。
- ・自然体で仕事ができる。眠ってしまったらベビーベッドに寝かせて仕事に集中できる。
- ・授乳しながら接客ができるし、子育ての話題で顧客とコミュニケーションができる。
- ・子どもがいても責任ある業務を任せられる。

【精神的側面】

- ・いつでも授乳できるという利便性と安心感が、授乳の時間と空間の枠を広げ、精神的にも開放された。
- ・乳腺炎の再発やおっぱいが止まる心配がなくなった。
- ・労働を通じて社会との接点を持つことができる喜びは大きい。
- ・社会から自分の存在を認められた気がする。
- ・責任ある業務は、やり甲斐につながっている。

5. 新しい働き方を選択した女性たちの意識の変容

5-1. 働き方に関する意識の変化

授乳に関するストレスが軽減されただけでは身分を正社員に切り替えることへの不安は解消されない。責任ある業務を任せられ、やり甲斐を感じられても、保育所の待機児童問題などの課題も残っている。そこで同社では、有能な女性たちのさらなる飛躍のために2016年1月より「短時間正社員制度」を導入した。同年4月時点で「短時間正社員制度」を選択した6名に対して、アンケート調査を行った（表3）。

表3 基本属性と意識の変化

| | | |
|----------|-----------------|-----|
| 年代 | 30代 | 3名 |
| | 40代 | 3名 |
| 勤続年数 | 3年未満 | 3名 |
| | その他(9年・10年・14年) | 各1名 |
| 子どもの数 | 2人 | 3名 |
| | 3人 | 2名 |
| | 4人 | 1名 |
| 通勤時間(片道) | ～15分 | 1名 |
| | 15～30分 | 2名 |
| | 30～45分 | 2名 |

コミュニティに根ざした社会的企業の可能性

| | | |
|-----------|--|----|
| | 4 5～6 0分 | 1名 |
| 残業時間（月平均） | 5～1 0時間 | 2名 |
| | 1 0～2 0時間 | 3名 |
| | 2 0時間以上 | 1名 |
| 変化（プラス面） | <ul style="list-style-type: none"> ・会社に貢献しようという気持ちがさらに大きくなった。 ・責任感が強くなった。 ・社会保険加入などの安心感。 ・社会復帰できた安心感。 ・時間配分や効率を考えるようになった。 | |
| 変化（マイナス面） | <ul style="list-style-type: none"> ・責任感というプレッシャーが多少増えた。 ・甘えが許されないと感じるようになった。 | |
| 今後の展望 | ・成り行きに任せる | 2名 |
| | ・経験や専門性を生かしたい会社で腕を揮いたい | 3名 |
| | ・転職／独立志向 | 1名 |

5-2. 結果と考察

制度の利用開始は2016年1月から4月の間で、いずれも前年の年収は200万円未満である。週当たり勤務日数は4ないし5日で、一日の勤務時間は①9時から17時、②9時半から17時半、③9時半から18時と、短時間勤務とはいえフルタイムに近い。なお週30時間を基本としながら時間内に処理できない業務を自宅で補填している者が1名であった。

子育てが一段落した後も短時間勤務を希望する者が2名、勤務時間を伸ばしたいと回答した者が4名であった。短時間勤務を希望する理由は、①自分の時間を確保したい、②両親の介護が必要になるであろうとのことである。なお、担当業務は、「営業・販売・販売管理」が2名、「総務・人事・経理」「製造・生産管理」「WEB作成・クリエイティブ系」「その他」が各1名と、多岐にわたる。

職務満足度に関しては、①給料・賃金の額、②休日・休暇日数、③仕事の内容、④与えられた裁量、⑤評価、⑥仕事と生活のバランスの6項目について質問した。母数が少ないため個々の数値化は省略するが、満足度の高い項目は②と④で、全員が「満足」もしくは「やや満足」であった。次いで高かったのが③と⑤で、「満足」および「やや満足」が、全体の83%に相当する。逆に、「少し不満」および「不満」が83%を占めたのが①である。規模の小さな事業所が、売り上げを伸ばして給与に反映させていく難しさがうかがえる。それでも半数が、「将来、経験や専門性を生かしてこの会社で腕をふるいたい。」と応

えていることは、経営者とともに企業の成長に関わりたいという意識の表れであろう。

A氏は、長時間労働から成果評価型にシフトするという考えを前提として、社会とのつながりを取り戻す「ワークライフミックス」を提唱している。¹² 方法論のようにワークとライフを分けるのではなく、混ぜてしまおうという考え方である。拙稿¹³では、出産・育児によるキャリアロスと女性の役割葛藤について述べた。これまでは家族の役割と家庭外の役割、特に職業上の役割をいかにバランスよく保つか、そのための時間配分をどうするのかという議論がなされていたが、一生を通じて家庭の領域と労働の領域さらに活動の領域それぞれに自尊心を維持できる生き方、意義ある何かをする機会、また家族としての絆を強化する機会を見出すものとして、ワーク・ライフ・バランスの“バランス”を“統合”と捉えることを提案した。統合することで役割葛藤の解決や失業による喪失感を払しょくすることにつながると考えた。私的領域の家事・育児・介護等は、本来男女問わず関わらざるを得ないものであり、短時間正社員の制度確立はワーク・ライフ・バランス推進の前提となる。

6. 社会的企業としての事業展開

6-1. 子連れ出勤とリクルーティング

A氏は子連れ出勤という就業スタイルを2009年に上梓するに際して、スタッフにアンケート（①この会社を選んだ理由、②実際に働いてみてどうだったか）¹⁴をとっていた。一般のアパレルメーカーでは、「そのブランドが好きだったから」という志望動機が多いが、一番多かった理由は「子どもがいても働ける会社だったから」であった。子連れ出勤というスタイル自体がリクルーティングに役立っている。今回筆者が実施したヒアリングでも、同様の声を聴くことができた。¹⁵

子連れ出勤実現のために必要なものは、「同僚や上司の理解や協力」と「短時間シフトでの調整や急な休みなどへの対応」であった。「労働を通じて社会との接点を持つ喜びは大きい。」「子どもがいても責任ある業務を任せられ、やり甲斐につながっている。」などの声は、事業所の規模にかかわらず、女性の活躍促進を考えるうえで参考になるだろう。それだけに、経済的自立につながる待遇改善は、規模の小さな事業所にとって営利・非営利を問わず大きな経営課題の一つといえよう。

6-2. 市民権を得た授乳服と子連れ出勤

A氏が起業を決意した当時、「授乳服」という言葉はなかった。当時の授乳は自宅でTシャツをまくしあげたり、開襟シャツをはだけてするものだった。せっかく商品を開発しても子育て中の母親は、自分の衣服に金をかける余裕はなく、意識も「自分のものは後回し」だった。授乳服の認知度が高まる中で、M社は、地域に開かれた企業としての役割も担ってきた。新社屋移転に伴い、空いているスペースを地域に開放し、男性もコミュニティビジネスに巻き込もうとした試みは注目に値する。

本社所在地には高学歴の女性が多いものの、前述の社員アンケート結果のように「仕事の勘を取り戻せるか不安」な女性は少なくないようだ。ヨガやアロマセラピーなど、自分の興味関心、得意とするテーマの教室がサロン感覚で開かれていた。また外国人居住者も多い地域ゆえ、このコミュニケーションスペースは、多様な人材のエンパワーメントと促進のインキュベーション施設としての活用も期待できる。ここでは経営に関する実践的な学びができるだけでなく、同じような悩みをもつ女性の交流の場にもなっていた。就労中断した女性たちが抱える課題を自ら解決するために、コミュニケーションスペースには、次々と地域で活動する組織・団体が集まった。¹⁶

6-3. 次世代育成への波及効果

数々の試みと実績は地方紙や雑誌等メディアにもとりあげられた。授乳服の紹介にとどまらず、女性のエンパワーメント、子育て支援、ワーク・ライフ・バランス推進などの活動に対しても内閣府や自治体、諸団体からさまざまな賞を受賞している。¹⁷単なる製造・販売だけではなく、社会の課題を解決する取組みが注目されるようになり、2013年度には、高等学校の教科書、「家庭総合（東京書籍）」と「家庭基礎（東京書籍）」に子連れ出勤が紹介されるに至った。次代を担う若者たちが、“生き方・働き方”を考えるきっかけ作りが中高教育機関においても着々と進められている。

6-4. ユニバーサルデザインへの広がり

いまや授乳服のユーザーは多様化している。モープラは乳がん患者や、脱ぎ着が厳しい高齢者、成長期の中高生からも求められるようになった。授乳下着を含む授乳服は、一定の属性を念頭に開発されたものではあったが、使い心地や素材、品質にこだわって改良を重ねていくうちに、「誰でも公平に使える」「使用において自由度が高い」「使用方法が簡単にわかる」「必要な情報がすぐに理

解できる」「ミスや危険につながらないようなデザイン」「無理のない姿勢で少ない力で楽に使用できる」「使い易い大きさ」の視点が盛り込まれていった。

障がいの有無にかかわらず、すべての人にとって使い易いようにはじめから意図してつくられた製品・情報・環境に、特定の属性の人たちを阻むものはない。A氏は、「ある特別なカテゴリーの人に良いものを作ることがすべての人にとって良いものになる、というのが理想なのかもしれません。」という。生活のなかで創造的な営みを重ねることで、文化は形成される。

7. まとめ

本研究では「授乳服」の開発経緯と、授乳服がもたらした生活様式の変化、新しい働きを選択した女性たちの意識の変容を明らかにした。

授乳服の開発が私たちの生活にもたらしたものは、社会・生活との関連から、以下のようにとらえることができるだろう。

- ・授乳服は、服飾界に新しいジャンルを生み出しただけでなく、物としての価値（value）と使用する女性たちの行動範囲を広げるという価値（worth）を持つ。
- ・授乳服は、出産によって就労中断した女性たちの早期社会復帰を促進した。
- ・授乳服は、女性の身体性の開放により、新しいワークスタイルを社会に提案するに至った。
- ・多様な視点から商品開発をしていくと、異なる属性がともに支えあう社会を実現する可能性をもつ。

なお、今回の聞き取り調査はごく限られたものであり、授乳服の可能性を検証するためには、さらに丁寧な先行研究ならびに実態調査が必要となる。複数の企業を対象に定性・定量調査、分析を行う必要性を踏まえつつ、社会の課題を解決する社会的企業概念の構築を今後の課題として、研究を深めていきたい。

【謝辞】

本研究を遂行していくにあたり、貴重な知見をご教授していただいた千葉大学名誉教授 宮崎 清 先生、調査にご協力くださいました有限会社モーハウス関係各位に、心から感謝の意を表します。

【注・引用文献】

- 1) 女性史総合研究会（1990）『日本女性生活史4近代』，東京大学出版会，1-197

コミュニティに根ざした社会的企業の可能性

- 2) 前傾 1) 98
- 3) 前掲 1) 100-108
- 4) 1918 年に平塚らいてう、与謝野晶子、山川菊栄、山田わか等のあいだで母性保護をめぐる論争がおり、1919 年には『主婦之友』『婦人公論』などにおいて、国家的な産児調節への反発を含む反響をよんだ。
- 5) 村田智明は『ソーシャルデザインの教科書』(生産性出版, 2014) の中で、「単に消費を煽るのではなく、社会貢献を前提にした恒久的にベネフィット(利益・恩恵)を共有できるデザインを考えることが、私たちデザイナーに求められる時代になった。そういったサステナブルな見識を持ったデザイナーやプロデューサーが牽引するデザインやプロセスの総称がソーシャルデザインなのである。」と述べている。
- 6) Borzaga, C. and Defourny, J., *The Emergence of Social Enterprise*, Routledge, a member of the Taylor & Francis Group, 2001. (ボルザガ, C. & ドウフルニ, J. 編, 内山哲朗・石塚秀雄・柳沢敏勝訳, 2004, 『社会的企業—雇用・福祉の EU サードセクター—』, 日本経済評論社) では、ヨーロッパの社会的企業の登場と発展、各国の相違点について述べている。社会的企業は公的な資源、市場的な資源、ボランティアな資源を多様に混合することで、社会サービスの供給を増加させることができるという。特に労働市場から排除されがちな女性や身体障害者の雇用創出への期待は大きい。
- 7) 宮崎清, (1996), 「人心の華」『現代デザインを学ぶ人のために』世界思想社, 198
- 8) 受賞対象名「授乳服を媒体としたデザインによるソーシャルアクション」、受賞番号: 10A02027。審査員の評価「授乳服という分野がまだ開拓されていなかった時代に、オーナー自身の体験をきっかけに、授乳服の提案を開始。子育て中の女性の社会環境を整え、新しい快適なライフスタイルをサポートする活動を展開している。一見、授乳服に見えないデザインでありながら、胸を露出することなく速やかな授乳を可能にしているこまやかな配慮がとてもよい。母親としての視点と専門家の視点を合せて、機能性と審美性を両立させている点、パイオニアとしてマーケットを切り開き、社会に向けて発信している点など、すぐれた活動として評価できる。」
- 9) 光畑由佳, (2009) 『働くママが日本を救う! 「子連れ出勤」という就業スタイル』, マイコミ新書, 95-96
- 10) 授乳期用のブラジャーを応用し、独立行政法人東京都立産業技術研究センターと共同で商品開発した「モーブラ・しゃんと」は、デリケートな乳がん手術後の胸にも優しく、医療関係者からも注目を集めている。クロスした布で胸を片方ずつ包む構造で、左右の胸の大きさに違いがあってもしっかりとサポートする。素材は低刺激で吸湿性に優れた「ベンベルグ」を使用し、肩や胴回りの部分の布地を幅広にして締め付けをなくした。術後は肌が過敏になり、皮膚障害が起きることも多いことから、内側の縫い目も平らにするなど、細部までこだわった。
- 11) 鳴海多恵子・平井千鶴・川端博子, (2014) 『授乳期における補正下着の利用実態と評価』, 東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ 65, 315
- 12) 前掲 9) 174-178
- 13) 遠藤雅子, (2008) 「40 代からの女性の新しい働き方に関する一考察 (博士予備論文要約)」, 『社会論集』第 14 号, 関東学院大学人文学会, 105-136
- 14) 前掲 9) 174-178
- 15) 2014 年 8 月 13 日青山店にて 2 名に半構造化インタビューを実施した。
- 16) コミュニケーションスペース「mo-baco」内に地元 NPO 法人の運営によるカフェを開設したが、2016 年 4 月現在閉店。起業のインキュベーション施設として地元に開放してきたが、継続的に運営していく難しさがここにも見られた。
- 17) 主な受賞歴は、「経済産業省 IT 経営百選最優秀企業」(2006 年)、「茨城県 男(ひと)と女(ひと)・ハーモニー功労賞」(2007 年)、「いばらきデザインセレクション」(2007 年)、「仕事と子育て両立支援奨励賞(茨城県)」(2008 年)、「内閣府主催平成 21 年度「女性のチャレンジ賞」(2009 年)以降も多数。2014 年には、「がんばる中小企業・小規模事業者 300 社」(中小企業庁)に選定された。

遠藤 雅子

A Study of Potential of Community-based Social Enterprise

—A Case of Nursing Clothes Development—

Masako Endo